

地域活性化という「遊び」

12

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュユ村」から

山本晋也

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいくなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュユ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュユ村副村長。

子供たちの 思わぬ発想に どう対応するか

6歳で
薪割りデビュー。
男の子なら
4歳くらいから
始めています



「予想外の行動が出ましたので今の競技はやりなおしとします！」
冬のある日、地元小学でスポーツチームに属する子供を対象にした

合同運動会で我が家の三男坊が引き起こした出来事。

運動会といっても雪でグラウンドが使えないので体育館で行う練習を兼ねたレクリエーションのようなものです。その中の種目に子供が四つん這いでゴムのキャタピラに入り

10メートルくらいの距離を競うキャタピラ競争というのがありました。

日頃すばしっこい子供たちといえども四つん這いだとなつた10メートルでもなかなか進まないものです。

日頃スポーツをしている子供たちは競争心が強く少しでも早く進もうと一生懸命手足を動かします。

それぞれに体力もあるし距離も短いので勝敗が僅差となりなかなか面白いゲームです。

ゴールした子供たちはそれぞれ全力を出し切って息も絶え絶えでした。

「てチームメイトからの声援を受けいよいよ我が家のいたずらっ子がスタートラインに登場。よーいドン！」

結果は他の子供たちの倍以上という信じられないスピードでゴール。

普段から山や田んぼで走り回っているとはいえ三男はやせっぽちで身長体重は平均以下。

農作業や薪割りや薪運びを手伝っている分多少持久力はあるかなという程度。

それが信じられないスピードを出しダントツでゴール。

これはいったい何が起こったのでしょうか。

会場がどよめき審判員が協議に入りました。

さて彼がいったいどうやってそんなスピードを出したのかというところ

キャタピラの中で、でんぐりがえりを3回転。

この単純な思いつきがたまたまこの競技の理にかなっており

彼はほとんど体力を使わずあつという間にダントツでゴールできたというわけです。



子供たちは大人が思う以上に自分で考えています。確かにうちの田んぼはこんな形をしています。間違いを直すことも大切ですが、考えているということは評価していきたいですね



大人はヘトヘトになって座り込んでしまった休憩時間にも子供たちは雪遊び



雪かきは現場によって道具選びや役割分担を楽に早くできるようによく考えてやっていないと時間も体力も足りません

彼

は自分の考えが当たったことに「やったー!」と思いましたが、協議の結果競技やりなおし。

まあ体を鍛えるための競技ですから苦勞しないでゴールしたのはいけないということですね。確かにそのあとの選手は勝利を手にするため間違いなく同じ行動をとるでしょうからできるだけ体を使わせたいという指導者の意図からは外れてしまいます。なので禁止にしましょうというのは僕も理解できません。

しかし最初でんぐりがえりをしてはいけないというルールの説明はなかったわけですから本当の意味でのルール違反ではありません。

そもそも運動会は遊びなので僕は我が子の勝利を取り消されて怒っているのでも何でもありません。ただ、スポーツも体力をつけることだけを重要視せずこういう子供たちの柔らかい発想の力にも注目すべきではないのかなと思っただけです。

僕ならその競技の意味を説明した上で以後でんぐりがえりは禁止としますが、その発想はユニークで評価に値することも同時に伝えたと思います。

田

舎暮らしは町の人たちがイメージするようなものではなく、いかに時間を作り出すかということが大変重要で

この点においては忙しい都会と全く同じなのです。

僕は子供たちと一緒に農作業や新仕事をしているとき

「めんどくさいなと思ったら他にめんどくさくない方法がないか考えよう」

「新しいやり方が見つかったも、もつといい方法があるかもしれないからずっと考え続けよう」

「新しい考えを見つかることを宝探しのように楽しもう」とよく言います。

子供たちが怪我をしたら単純に禁止にせず

次はどうやったたら怪我をせずにその遊びができるかを考えてもらいます。

そんな思考が頭にも体にも染みついてる三男は

キャタピラ競争で前の選手が競争している間、勝ちたいというより

「どうしたらもっと早く進めるかな」ということをずっと考えていたそうです。

この思わぬ発想にどう反応するのが今の大人たちに与えられた課題ではないでしょうか？
老いては子に従えとはよく言ったもので

「子供の未来に大人が作ったものを渡す」という時代は終わりを迎え

「大人は子供が未来を作る手助けをする」という時代に入ると思います。

昨日は節分でした。

季節の変わり目ですが変えていかなければならないのは

僕たち大人の考え方のような気がします。